

橋詰良一著

「家なき幼稚園の主張と実際」より

(八)

第十一 保育の内容 (つづき)

英語は幼児の時から

英語を外国婦人たちに教えてもらいたいと考えた私の願いは、言語の著しい発達期である幼児の時から外国婦人に接しさせて、自然のうちにその言葉に馴れさせ日本の言語を覚えていくと同じように、外国の言語をも吞み込ませ置いてやることは、後年の生活時におけるいろいろの悩みから救ってやる唯一の方法だと考えますからです。

東京の子どもが池田へ来て私の幼稚園に通い始めると、三日たぬうちに池田言葉になってしまいます。それと同時に、他の幼児たちもいくらかは早くも東京の言葉になって行きます。東京から来た親たちのそれを恐れることは、悪疾が感染するよりも甚しいように見えますが、そのように鋭敏な言語の発達、聞いて覚える言語が直ぐに舌を通じて話し出されるまでの発達を熟知してい

る親たちは、この時期を利用して外国語の基礎を据え付けてやるだけの親切をなぜ持ってやらないのかを私は長らく疑ってまいりました。

成人の後、というまででなくても、中等学校時代になってから急に記号としての英語を覚えさせられた者にはおのずからの言語となつて、聞けばわかり、わかれば話せるというまでに自分のものにすることはできないのですが、日本語を覚える通りに英語を覚えたら、何の苦もなしに日本語即英語の三昧さんまいに入ることができ、ほんとに微塵ちりの苦もなしに英語を話す人になれる。

それは一たび小学期を英語なしに通過しても、幼児期における言語の基礎は其の言語に触れるときに再燃して来る。

幼児に覚えた郷土の言葉が、後年其の郷土人に会ったとき卒然として再燃し正に郷土人たるの資格を以て話し得る事実は何人も経験しているところだと思いますが、私は、外国語なしに世界的な知識の門戸をたたき得るまでの自由を持たない日本人には、中

学女学の授業難はなくとも、かくして幼児期から外国語培養をするのが、何より大きな救いであると確信しています。

で、近くに住んでおられたアレキサンダー女史（長くウィルミナ女学校長を勤められた米国婦人）を頼んで、毎週遊びに来ていただいて、幼児たちに話を聞かせていただいたのですが、意外に早く、聞くことから理解していききました。

園から英語に親しんで居た幼児が、正科に英語のあるような小学校を通過して、現在男女学校で英語の模範的成績を得ている実例はいくらもあります。

各園の年中行事

各園の環境をなしている大自然が、いつとはなしに各園の年中行事をつくって子どもたちや先生たちを喜ばせています。

それを表にして置きますから、鳥かん図にあわせて見てほしいと思います。

表 各園に出来た年中行事の主なるもの、から

一月……お正月の会、新年拝賀式、お鏡餅開き、冬ごもり、たこ上げ、カルタ、羽根つき、母子会等

二月……節分の会、雪なげ、だるまつり、紀元節、つくし取り等

三月……おひなまつり、卒業式、卒業記念子ども園遊会、卒業

記念旅行、梅見等、四月入園式、よもぎつみ、れんげつみ、夜ざくら会、お花祭、天長節、わらび狩、お花つみ、彼岸、身体検査等

五月……春季遠足、端午の節句、草つみ、よもぎ餅つき、雑魚取り、水遊び、いちごつみ等

六月……しじみとり、松林にてお話、水遊び、植物園菖蒲等

七月……七夕まつり、夏祭、水泳、お川遊び、噴水、夏祭等

八月……暑中休み、水泳、貝拾い、魚すくい、童謡盆踊り等

九月……夏休み、お月見、秋の虫、コスモスつみ等

十月……アンダーセンまつり、お月見、きのことり、松露と

り、菊見、栗拾い、秋季遠足、動物園見物等

十一月……明治節、新嘗祭、木の葉拾い、ぶどうがり等

十二月……餅花作り、お正月の支度、クリスマス、冬休み等

第十二 屋外温度の調査

私はこのように野の幼稚園をつくって屋外を常の家とするような子どもの生活の営みを計画した最初から、せめては僅かなながらも何かの参考となる材料を自然のうちに集めていきたいと願って来ました。

室内温度と室外温度

一番最初に私が研究の必要をみとめたことは室内温度室外温度とがどれ位ちがうものであるかということを入々にも見せ、自分も見たいということでした。

で、池田に集合所ができるとすぐ室内と室外(南うけの軒の下)とに寒暖計をとりつけておいて、毎日の日記へ午前九時と午後一時とに温度を記入しておくようにしてきました。それは池田以外の各幼稚園にも同様に実行を続けてきたのですが、今日集まったものを静かに見ていきますと、実に喜ぶべき資料を得たものだと思います。

この資料によりますと冬の平均温度をみても夏の平均温度をみても、午前でも午後でも、室内でも、室外でも想像したほどの、温度の差のないことが知れます。

夏の朝の室内室外の差はわずかに摂氏〇・八度、午後は二・九度、冬は南うけの外部とストープをたいてある内部の温度の差が、朝でも、午後でも、五度か六度の差よりないのをみますと、室内から室外の保育にうつって行くことは決して困難を感じないものであることがわかります。

その他、一日一日の温度について、内外を比較してみても、やはり大差のないことを見ると非常に心丈夫な資料を父兄たちに見

せることができます。

このような証左を父兄たちに見せましてからは、しだいに室外を恐れる大人の心持が緩和されていったように思われます。

冬は室外が温い

一般に、冬季はどうしても室内よりも室外が寒いものだと誰でも信じきっていたものでありますが、南をうけて強い北風をよけることのできる場合は概して、室内よりも室外の方が暖かいことをこの表が示して居ます。もっとも、朝のうちはストープの温味が薄いために、日光のある室外が暖かく、午後はストープが十分に熱するためにくらか室内が暖かになっていくことは明瞭であります。それにしても内気と外気とが、かくまでの近い温度におかれていることを、私たちも気づかなかったのであります。

その他、一日、一日の内外温度を比較してみても、両者の間にはほとんど大きな温度の差違なきを知ることができます。

(次に箕面の家なき幼稚園の一年間を通じた月別、室内外の温度表が掲載されていますが、はぶかせていただきます。大変細かい調査で、頭がさがります。

編集部)

第十三 野外遊戯の自然研究

若い女性たちが、幼児と共に大自然の中を悠遊して、かわいい子どもたちを満足させるための工夫や、幼児たちをよくはぐくむための作業として知らず知らずのうちに発見した自然物の取扱いは、今までの教育界に見ることのできなかつた「自然恩物法」ともいうことができましょう。

今、三十幾人の先生たちから得た報告を土台として、書きながら見ると、実に左のようなたくさんな種類にのぼっております。

□生物を対象とするもの

かえるつり、イナゴとり、バッタとり、せみとり、しじみとり、かたつむりとり、かにとり、ざごとり、えびとり、どじょうすくい、小さい竿で魚釣り、きりぎりすとり。

□草木を対象とするもの

つくしつみ、松露とり、きのことり、笹のシンで草りをごしらえる。松葉で旗刀を作る。笹舟作り、れんげの首輪作り、麦笛作り、どんぐりごま、からすの豆で笛を、たんぼほの茎で笛を、笹の新芽で亀を、桜の花びら通し、クローバーの茎でちゅうを作る。菊の実と杉葉でかんざし作り、つばきの葉の草り作り

り、桐の実のからを二つ松葉でつないで舟を、いちじうの実で人形の顔、もくれんの花びらのお皿、どんぐりのはかまでままごとの茶わん、わらびのたけたもので刀鉄砲を、ポプラの葉でかしわ餅、つばなの先でおひげや髪の毛、いちじうで扇作り、松葉すもう、わらびとり、植木作り、松葉ではさみと弓を作る。芦の葉で粘土のちまき、まるいポプラのようなつる葉で粘土のかしわ餅、れんげ・すみれ・たんぼほなどいろいろの草花で花やさんごっこ、おしろい花を集めて店やごっこ、ポプラで引き合い、花や草の汁で絵具やごっこ、すすきの長くなったので刀作り、木の葉をままごとに、れんげの花におおばこの葉を着せて人形作り、すすきの先を結んでちゅうちん作り

□金石粘土を対象とするもの

粘土細工、石ころを集めてかんでき、泥で左官やさんごっこ、土でおまんじゅうやさんごっこ、河原の石つみ、瓦くずを拾って積み上げる遊び

□木竹を対象とするもの

木切れて汽車を作る
次に先生たちの報告の一節を書きましょう。(一部のみ)

◇松の皮からいろいろなものの形を作り出しました。これは思い

出深いものです。私は幼年時代を古い城下町で過ごしましたが私の幼稚園も小学校もそのお城のおほりばた近くでしたからお城へはよく上りました。そのお城の古い松の木の幹の皮を……いつまではがしてもかぎりがなかったものでしたが、ちょうどあの子ども博への出品が動機になって子どもをお山へ連れて行った時でした。

私たちには思いも及ばないものの形を子どもたちは、はがした松の皮から見いできました。その時は本当にうれしと思いましたが、「ああ、人が走ってはる……」と一瞬懸命にそうってはがしたり「おさるがいるわおさるが……」というように。

◇春がたけたころはタンポポです。タンポポの首と首とで落とし合いが盛です。それは基をもんで柔らかくしたり、二、三日も前からお家へ持って帰って塩づけにしてまで。塩づけのは強くて、つけてないのにはなかなか負けません。中でも

1 はげちゃびん（といていました。むく毛のとんでなくなつたもの）が一等強く

2 おじいさん（むく毛のまだあるもの）

3 おじいさんになるまでの花のしぼんだもの

4 咲いている花

の順でした。中でも白タンポポはこと更强的ものでしたから、白

い花をつけているのを見つけたらとんで行ってすみ取っていました。白タンポポのはげちゃびんときたら一等いいのですから、先を争ってすみに行きます。（子どもは散ったあとでも基の色でよく知っています）大きい子どもたちはそのいいのを早くすみですが、小さい人たちは黄色に咲いている花でもたんと取る方がいいといって、多いのを喜んでおりましたけれど。

◇つばなの葉が紅くなった晩秋から初冬にかけてのころ、あの広い芝原で遊んでいる時、その紅く染まった葉を子どもの手首にまで結んでそれをうで時計というにしました。みんながそれ喜んでそのころはあそこに行くたびに結んでいました。両方の手首にまで。一等初めに、とらちゃんに結んで上げたように覚えませす。何でもないようですけれど子どもにとっては……その時うれしく思いました。

◇野生大根の先に細いポシャポシャとしたものがついている。それを引き抜いてあごの下につけ、ぼくはおじいさんだと喜ぶ。

（幼児の案）

□野で遊ぶお遊び

かくれんぼ、鬼ごっこ、めんない千鳥、ふるせんとまとめて、

中の中の小ぼんさん、汽車ごっこ、ままごと、戦争ごっこ、剣劇、たこ上げ、羽根つき、すわり鬼ごと、子とろ、つみ草、靴

かくし、いなひき、手ぬぐい落とし、帽子とり、じゃんけん遊
び、石けり、大日本字書き、魚釣り、ざこトスカン取り、走り競
争、すわり当番、まり送り、スプリンレース、リレー、丸とび、
すもう、うずまき鬼ごっこ、ここはどここの細道じゃ、砂山のすべ
りごっこ、トンネルごっこ、兵隊遊び、ズイズイズッコロボ
シ、乳母車で電車ごっこ、お砂で粉やごっこ、草の上でお話ご
っこ、猫とねずみ、歌劇ごっこ、日傘で遊戯、目かくし鬼ごっ
こ、技能のポート流し

以上の種目をしずかに眺めて行きますと、ほんとにやさしい子
どもたちには崇高な大自然の作為に触れて喜々として神の招きに
近よりつつあるようすがまざまざとして思い浮かべられます。

もし、今後の自然保育者が、幼児を自然に導びこうとする手引
きとして、参考さるるなら、最適当であると思います。

おもしろいことはこの考察が、大抵は幼児自身の生活から娘た
ちが、養い覚えたものかまたは発見したものであって、かの大人
的な、功利的な考えから出発したような、苦心のあとをとどめて
いないことであります。

(つづく)

幼児の教育 第七十四巻 第二号

二月号 © 定価二〇〇円

昭和五十年一月二十五日印刷

昭和五十年二月 一日発行

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 守 真
発行者

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

108 東京都港区三田五ノ一二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売
所フレーベル館にお願いいたします